深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第82集

熊野遺跡 VI

2007

深谷市教育委員会

深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 82 集

熊野遺跡 VI

2007

深谷市教育委員会

内出八幡塚古墳周溝出土遺物

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、南は比企丘陵と接し、北端は群馬県と接しています。この広大な市域の間を利根川・荒川という国内でも有数な大河川が貫流しています。

こうした豊かな自然環境のもと、古代人の暮らした足跡が埋蔵文化財として今なお多く眠っています。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡をはじめとして、弥生土器で有名な上敷免遺跡、県指定史跡の鹿島古墳群、榛沢郡家正倉跡と想定される「中宿古代倉庫群跡」や国指定重要文化財「緑釉手付瓶」を検出した西浦北遺跡など、重要な遺跡が多数存在します。

今回報告する熊野遺跡は、ＪＲ高崎線岡部駅や国道17号線に近いことに加え、平成元年に開始された岡中央土地区画整理事業などにより各種開発が進み、これらに伴う発掘調査が多数実施されてきました。その結果、７間×３間をはじめとする大規模建物群や竪穴住居跡などとともに、道路状遺構・連房式鍛冶工房・石組井戸など特殊な遺構も検出されました。さらに、役人が使用したと考えられる帯金具や円面硯なども数多く出土しており、熊野遺跡は役所的機能を有していたことが想定されています。

本報告書は、アパート建設に先立ち平成７年に実施した熊野遺跡38次調査の成果をまとめたものです。古墳跡や鍛冶関連遺構などが検出され、熊野遺跡の性格を考える上での資料を追加することができました。本書が学術・教育関係はもとより、文化財の保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成19年3月

深谷市教育委員会
教育長　猪野幸男

例　言

1．本書は、埼玉県深谷市岡に所在する旗野遺跡の、平成７年度に実施した 38 次発掘調査の成果をまとめたものである。

2．文化財保護法第 57 条の３第１項に基づく事業者宛の指示通知は、次の通りである。
　平成７年６月２日付　教文第３－ 124 号

3．文化財保護法第 57 条第１項に基づく発掘調査の届出は、次の通りである。
　平成７年５月 26 日付　教文第 191 号

4．発掘調査は平田重之が担当し、平成７年６月１日～平成７年７月 31 日にかけて実施した。

5．出土品の整理及び実測・観察表の作成は、竹野谷俊夫が行なった。

6．図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。

7．本書の執筆は、宮本直樹が行なった。

8．本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　例

1．発掘調査位置図は岡部町都市計画図（1/ 2,500 及び 1/ 10,000）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/ 25,000）を使用した。

2．遺構実測図は、現場では基本的に 1/ 20、カマド実測図を 1/ 10 とし、本書掲載の段階で 1/ 60 及び 1/ 30 とした。遺物については、基本的に 1/ 3 で掲載した。

3．図中の方位は、座標北を示す。

4．遺物観察表の数値に（　）のあるものは推定値、《　》のあるものは残存値を示す。

5．土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。

6．遺構実測図中の英数字は、以下を表す。
　ST 古墳　　SJ 竪穴住居跡　　SK 土坑

目 次

序

例言・凡例

目次

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過 …… 1
　1．発掘調査の経緯 …… 1
　2．発掘調査・整理報告の経過 …… 1
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 2

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境 …… 4
　1．地理的環境 …… 4
　2．歴史的環境 …… 4

Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 6
　1．熊野遺跡の概要 …… 6
　2．発見された遺構と遺物 …… 6

Ⅳ　まとめ …… 26

挿図目次

第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点 …… 3
第２図　熊野遺跡38次調査地点位置図 …… 3
第３図　周辺の遺跡分布 …… 5
第４図　熊野遺跡38次調査全調図 …… 7
第５図　１号墳周溝実測図 …… 8
第６図　１号墳出土遺物実測図(1) …… 9
第７図　１号墳出土遺物実測図(2) …… 10
第８図　１号墳出土遺物実測図(3) …… 11
第９図　１号墳出土遺物実測図(4) …… 12
第10図　１号住居跡実測図 …… 13
第11図　１号住居跡出土遺物実測図 …… 14
第12図　２号住居跡実測図 …… 16
第13図　２号住居跡カマド実測図 …… 16
第14図　２号住居跡出土遺物実測図(1) …… 17
第15図　２号住居跡出土遺物実測図(2) …… 18
第16図　２号住居跡出土遺物実測図(3) …… 19
第17図　２号住居跡出土遺物実測図(4) …… 20
第18図　２号住居跡出土遺物実測図(5) …… 21
第19図　１～４号土坑実測図 …… 23
第20図　土坑出土遺物実測図(1) …… 23
第21図　土坑出土遺物実測図(2) …… 24
第22図　グリッド出土遺物実測図(1) …… 24
第23図　グリッド出土遺物実測図(2) …… 25
第24図　38次調査周辺遺構図(1) …… 27
第25図　38次調査周辺遺構図(2) …… 28
第26図　内出八幡塚古墳全体図 …… 29
第27図　38次・44次調査鍛冶関連遺構図 …… 30
第28図　44次性格不明土坑出土遺物実測図 …… 30
第29図　44次１・２・３・５号土坑出土遺物実測図(1) … 31
第30図　44次１・２・３・５号土坑出土遺物実測図(2) … 32

写真図版目次

図版１　全景・１号住居跡・２号住居跡・１号土坑
図版２　１号墳・１号住居跡出土遺物
図版３　２号住居跡・土坑出土遺物
図版４　土坑・グリッド出土遺物

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過

1．発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡や、弥生土器で知られる上敷免遺跡、重要文化財に指定された緑釉手付瓶を出土した西浦北遺跡など、著名な遺跡が多い。

熊野遺跡は、深谷市の北西に位置する。ＪＲ高崎線岡部駅のすぐ北西にあたり、県道蛭川普済寺線と国道17号線に挟まれた範囲である。近年までは駅から少し離れると家も少なく、畑が多く残っていた。しかしながら、『岡中央土地区画整理事業』が平成元年に立ち上がり、事業が進展するに伴い景観が激変しつつある。

この区画整理事業に先立つ発掘調査は、平成４年度から始まり、調査件数は急増した。それ以前の熊野遺跡における調査は、岡部西小学校及び岡部西幼稚園建設に伴い４次の調査が実施されていたにすぎなかったが、平成４年度以降は現在までに162次に及ぶ発掘調査が実施されている。

調査の結果、竪穴住居跡700軒、掘立柱建物跡150棟を始めとして、石組井戸・道路状遺構・土橋状遺構を伴う大溝・連房式鍛冶工房など特殊な遺構も多数検出された。遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開珎・刻字紡錘車など一般の集落では見られない出土品が注目される。

今回報告する発掘調査は、アパート建設に先立ち、平成７年に実施したものである。

まず、平成７年４月８日に、株式会社石作　代表取締役石原孝氏（以下、「事業主」と記す）から、埋蔵文化財の所在についての照会が旧岡部町教育委員会（以下「町教委」と記す）にあった。町教委では、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡の範囲内であることを確認し、遺構の存在の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を書き添えて、４月17日に事業主に書面にて回答した。同日に、試掘調査依頼書が事業主から提出されたので、翌４月18日に試掘調査を実施した。敷地内において３本のトレンチを設定したところ、古墳周溝や竪穴住居跡・土坑などを検出した。

これを踏まえ、町教委と事業主で協議を重ねた結果、工事の変更は不可能であり遺跡の破壊は免れないため、記録保存のための発掘調査を旧岡部町遺跡調査会が実施することで調整を進めた。事業主もこれを了承し、平成７年５月21日付けで文化財保護法57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、町教委を経由して文化庁長官宛に提出された。

これを受けた遺跡調査会では、文化財保護法57条の１に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を所定の手続きを経て、平成７年５月26日に文化庁長官へ提出した。

埼玉県教育委員会教育長からの埋蔵文化財発掘届に対する事業主宛の指示通知は、平成７年６月２日付け教文第３－１２４号においてなされた。

実際の発掘調査は、平成７年６月１日に開始し、同年７月31日まで実施した。

2．発掘調査・整理報告の経過

(1)　発掘調査の地番及び遺跡番号

熊野遺跡の埼玉県遺跡登録番号は、№63－017である。調査地点の地番は、深谷市岡字内出2866番地である。岡中央土地区画整理事業では、18街区１画地となる。

熊野遺跡では、先述のとおり過去に多数の調査が実施されてきた。深谷市が行なったものと(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものを合わせると、現在170地点に及ぶ。

今回報告分は、平成４年度以降実施した調査のうち38次調査と命名したものである。

(2)　表土除去

発掘調査は、６月１日から着手した。作業は、まずバックホーによる表土除去から始めた。

表土から30～50cm掘り下げると黄褐色ローム面が表れたので、これを遺構確認面とした。

全ての作業を終えるのに丸１日を要した。

(3)　遺構確認・基準点測量

表土除去に引き続き、翌２日には調査補助員による遺構確認作業を実施した。その結果、古墳周溝１、竪穴住居跡１軒、土坑・ピットを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、遺構の掘り下げを開始した。

(4) 遺構掘り下げ及び図化作業

遺構の掘り下げは、調査区東端の1号住居跡から始めた。遺物は小破片のみの出土であり、床面を検出した段階で、他の土坑の掘下げを始めた。

6月5日には周溝にベルトを2本設定し、東部からA・B・C区とし、A区から掘下げを開始した。途中遺物が出土したので、極力原位置を保つように注意を払った。6月8日にはB区を掘り始め、周溝と重複した2号住居跡を検出し、平行して掘下げた。15日にはC区に移った。

基準点測量は株式会社中央航業研究所に委託し、6月29日に実施した。その後、埋没状況を調べるための断面観察を実施し、1/20の縮尺で図化した。その後、遺物の出土状況の写真撮影を行い、1/20の縮尺で図化した。

遺物を取り上げた後、床面の精査を行い、柱穴・壁溝などを検出し、掘り下げを実施した。さらに、カマドの調査が終了したところで、完掘状況の写真撮影を実施し、別の遺構へ移動した。

調査の全工程が終了し、機材・プレハブ等の撤収が完了したのは、平成7年7月31日のことであった。

(5) 整理・報告

発掘調査で検出された遺物の水洗・接合は、深谷市教育委員会が平成18年6月より開始した。これと並行して、図面の整理作業を行なった。遺物の実測は、平成18年7月から行い、併せて図版の作成を行なった。9月以降原稿を執筆し、たつみ印刷株式会社に入稿したのは11月のことであった。

報告書の印刷が完了したのは、平成19年2月28日のことである。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

(1) 発掘調査（平成7年度）

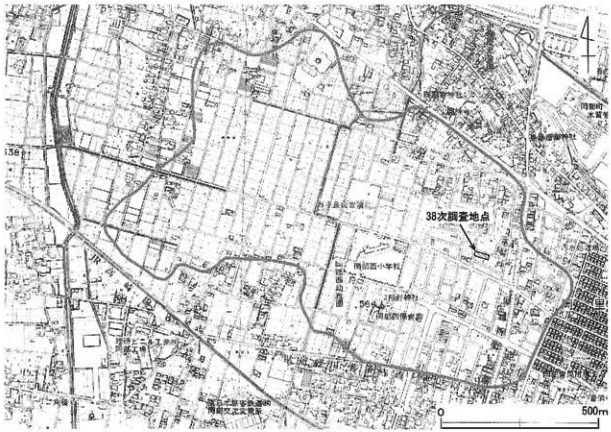
岡部町遺跡調査会会長		丸山忠雄
	文化財保護室長	駒宮史朗
	文化財保護室長	米沢信夫
	主任	中野弘
	主任	鳥羽政之
	主事	平田重之
	〃	宮本直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫

発掘調査参加者

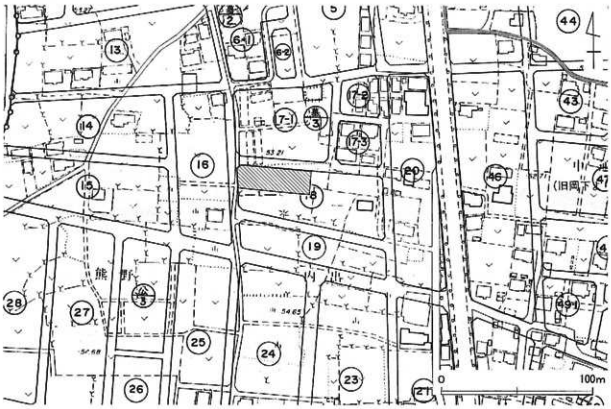
今成ハル子	大野ハツ	岡和夫	小菅辰治
小菅雄一	斎藤好江	柴崎文明	渋沢ヤイ
高橋ちよ子	田嶋律子	田中秀子	橋本純子
畑山せつ子	松村あき	三浦フミ	矢内忠良

(2) 整理・報告書刊行（平成18年度）

深谷市教育委員会教育長		猪野幸男
	教育次長	古川国康
	次長	中村保雄
同岡部教育事務所長		榛田一郎
	課長補佐	鈴木八十子
	主査	金井登美子
	〃	根岸宏
	〃	鳥羽政之
	〃	森田富雄
	〃	宮本直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫
	〃	黒澤恵
	〃	佐藤由江
	〃	布施みゆき



第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点



第２図　熊野遺跡38次調査地点位置図

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境

1．地理的環境

深谷市は、埼玉県の北部に位置し、北は利根川を挟み群馬県と接している。

熊野遺跡は、深谷市岡字熊野他に所在する。JR岡部駅の北西に位置し、東西1,300ｍ、南北1,000ｍの範囲に及ぶ。近年は市街化が進んでいる。

遺跡は、櫛挽台地の北部に立地する。南方には標高116ｍの山崎山とこれに連なる諏訪山が存在する。遺跡の中心から600ｍ北は崖線となり、比高差20ｍをもって妻沼低地へ移行する。また、櫛挽台地の西は藤治川により区分され、本庄台地と接している。

2．歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛挽台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から押圧縄文・爪形文土器などが検出され、草創期の土器として注目されてきた。遺構では、四十坂遺跡で前期の竪穴住居跡が、水窪遺跡や菅原遺跡から中期の住居跡が、上宿遺跡で後期の敷石住居跡が検出されている。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。その後、平成２年の発掘調査では、再葬墓や土坑墓群が検出された。

古墳時代に至ると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期に至る方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連綿と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鋲留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から５世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、６世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稲荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

この他に、熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、６世紀代の古墳跡24基（円墳23、帆立貝式古墳１）が調査された。弾琴埴輪や壺を捧げ持つ巫女の埴輪など６体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

なお、櫛挽台地北部における古墳時代の集落は、現在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数か所が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛挽台地以外に分布の中心が認められる。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに162次に及ぶ調査が実施され、700軒を超える竪穴住居跡、150棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・運房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、円面硯・帯金具・唐三彩の陶枕・刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

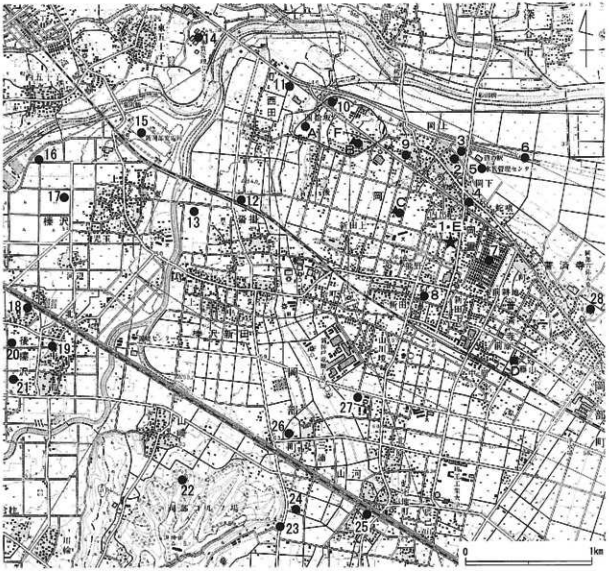
なお、集落の開始時期は、131次調査１・２号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と考えられている。さらに、１次調査において検出された７間×３間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛挽台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡家に伴う正倉跡と推定され、７世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。これと前後して台地直下には「滝下大溝」が掘削された。その北東には条里遺構が検出されたことから、灌漑と運河の機能を併せ持っていたことが考えられる。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡では、８世紀第２四半期と考えられる墨書文軒丸瓦などの瓦が多量に出土する範囲があり、鹿寺跡と推測されてきた。平成13年度に町教委が実施した確認調査により、版築された基壇状遺構が検出された。近接する住居跡からは、「檝」の刻字瓦や「寺」と墨書された土師器坏なども出土し、寺院跡の可能性が高まった。

このように、奈良～平安時代の櫛挽台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

古代から中世にかけては、まず岡部六弥太館跡があげられる。方形に廻る堀跡や井戸、土塁墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西観ヶ谷遺跡では、軸を揃えて並んだ６棟の掘立柱建物群が確認された。



1．熊野遺跡　（律令期集落・官衙・中世居館）
2．中宿遺跡　（郡衙正倉・律令期集落）
3．滝下遺跡　（河川跡・律令期集落）
4．岡廃寺　（寺院跡・古墳～律令期集落）
5．岡部条里遺跡　（古墳集落・条里水田・律令期居宅）
6．砂田前・樋諸遺跡　（古墳～平安集落）
7．白山遺跡　（古墳群・律令期集落・中世居館）
8．新田遺跡　（律令期集落）
9．上宿遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
10．四十坂遺跡　（縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群）
11．原ケ谷戸遺跡　（縄文・古墳集落・古墳群）
12．水窪遺跡　（縄文・古墳集落・周溝墓・古墳群）
13．新井遺跡　（律令期集落）
14．東五十子遺跡　（古墳・中世集落）
15．六反田遺跡　（古墳・中世集落）
16．大寄遺跡　（縄文・弥生～律令期集落）
17．西浦北遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
18．東光寺裏遺跡　（縄文・平安集落）
19．横沢六郎成清館跡　（中世）
20．石蒔遺跡　（古墳～平安集落・周溝墓）
21．地神祇遺跡　（古墳～平安集落）
22．千光寺遺跡　（古墳群・平安集落）
23．西谷遺跡　（縄文）
24．茶臼山遺跡　（古墳群）
25．伝上杉館跡　（中世）
26．山河聖天社　（中世）
27．西館ヶ谷遺跡　（律令期集落・中世居館）
28．伝岡部六弥太館跡　（中世）
A．四十坂浅間山古墳　（円墳）
B．宮脇荷塚古墳　（前方後円墳）
C．お手長山古墳　（帆立貝式古墳）
D．前原愛宕山古墳　（方墳）
E．内出八幡塚古墳　（円墳）
F．四十塚古墳群　（古墳群）

第３図　周辺の遺跡分布

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1．熊野遺跡の概要

熊野遺跡は、櫛挽台地北端部に展開する集落跡である。遺跡の標高は55ｍ前後であり、南西から北東に向かって緩やかな傾斜を有している。遺跡から北東へ約600ｍで台地縁辺部に達し、眼下には利根川及び小山川により開析された妻沼低地が開けている。沖積地との比高差は、約18ｍ程である。遺跡は、南北約1,000ｍ、東西約1,300ｍを測り、当地域最大の規模を誇る。

熊野遺跡は、主として奈良・平安時代～中世にかけて営まれた複合遺跡である。それ以前の櫛挽台地北部は、古墳群が造営される墓域であった。熊野遺跡内にも、終末期の帆立貝式古墳であるお手長山古墳と、これに続くと考えられる内出八幡塚古墳（円墳）が築造された。その後7世紀中葉から後半にかけて、遺跡が形成されたことが、これまでの発掘調査により明らかとなっている。

発掘調査は、まず岡部西小学校建設に先立ち、昭和52年～54年に実施されたのが始まりである。3次にわたる調査の結果、奈良～平安時代を中心とした竪穴住居跡83軒、掘立柱建物跡2棟が検出された。遺物では、帯金具や円面硯などの出土が注目される。

また、平成4年度から始まった岡中央土地区画整理事業に伴う発掘調査は、現在までに162次にわたり実施されている。調査の結果、竪穴住居跡700軒、掘立柱建物跡150棟あまりが検出された。このほか、7間×3間の大型建物や、大規模な石組井戸跡、連房式鍛冶工房、大溝等が特筆される。出土遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開寶・刻字紡錘車などが特筆される。さらに、鎌・鋤先・斧などの農耕具や刀子などの鉄製品も多いが、鉄鏃や小札などの武器・武具の出土も注目される。

さらに町と並行して実施された㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団の4次の調査により、竪穴住居跡201軒、掘立柱建物跡110軒、道路状遺構、井戸跡4基などが検出されている。遺物では、陶棺や置きカマドなども出土している。

遺跡が形成されたのは、131次調査1号・2号住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、7世紀第3四半期と推定される。その後、10世紀代まで集落が営まれていたことが判明している。

2．発見された遺構と遺物

今回報告する発掘調査地点は、深谷市岡字内出2866番地（岡中央土地区画整理事業地内18街区1画地）である。平成4年度以降に実施された熊野遺跡内の発掘調査では、38次調査にあたる。

調査により検出された遺構は、古墳周溝1、奈良～平安時代の竪穴住居跡2軒・土坑4基、ピットである。

以下、順を追って詳述する。

1号墳

先述したとおり、内出八幡塚古墳と呼称される。周溝の一部が、東西33ｍの調査区内において弧を描いて検出された。幅は6.3～10.1ｍを測る。外周は緩やかに落ち込むのに対し、内周はやや角度をもって掘り込まれる。底面は多少の凹凸があるが、最深部は周溝の内側寄りにあり、深さ72cmを測る。

断面観察によれば、埋土全体に焼土粒や炭化粒が混入していた。覆土上層には浅間Ｂ軽石の堆積層が認められ、古代末にはほぼ埋没していた状況が想定される。

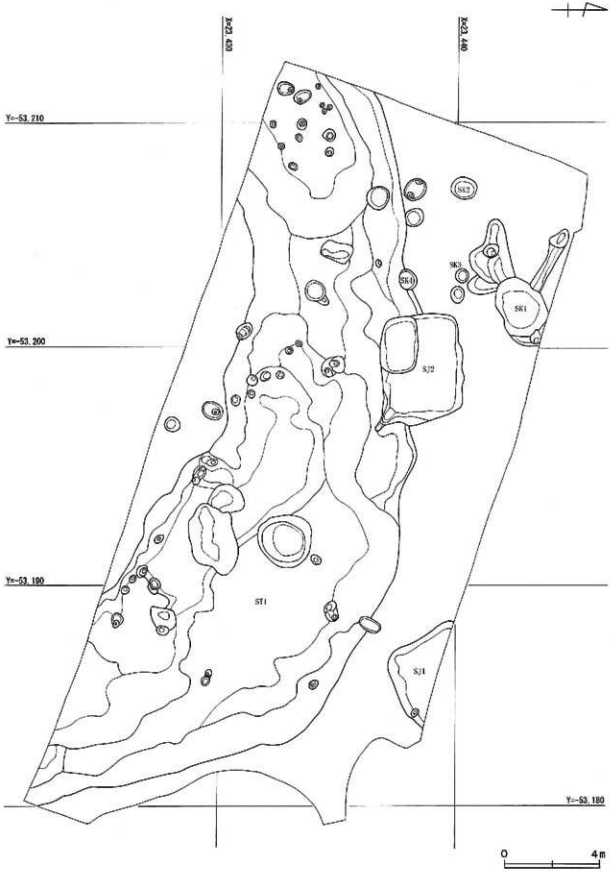
出土遺物には、土師器の坏・高台埦・甕・甑、須恵器の坏・高台埦・長頸瓶・短頸壺・フラスコ瓶・脚付盤・甕、土錘、羽口、鉄製品、埦形滓、鉄滓、鉄塊系遺物などがある。ただし、これらは10世紀代まで下るものもあり、後世の混入と考えられる。

1号竪穴住居跡

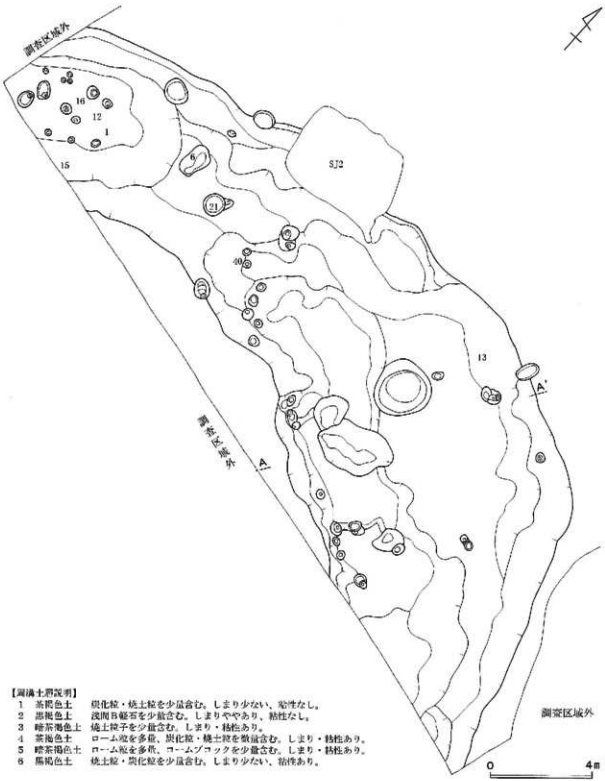
調査区の北東に位置する。北半部が調査区域外にあり、確認できたのは南北3.44ｍ、東西3.38ｍである。壁は角度を持って掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、42cmを測る。

しかしながら、調査区北側に接する道路建設に伴う発掘調査（第44次）により、本遺構の全体像がほぼ明らかとなった。平面形態は不整方形を呈し、南北4.30ｍ、東西4.21ｍの規模である。かまどを持たず、壁溝も廻らない。東壁に接して直径18～55cmのピットが並ぶ。

出土遺物は、土師器の坏・甕・台付甕、須恵器の坏・蓋、土製紡錘中などがある。7世紀第4四半期と想定される。

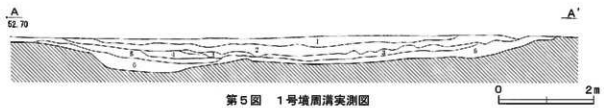


第４図　熊野遺跡38次調査全測図

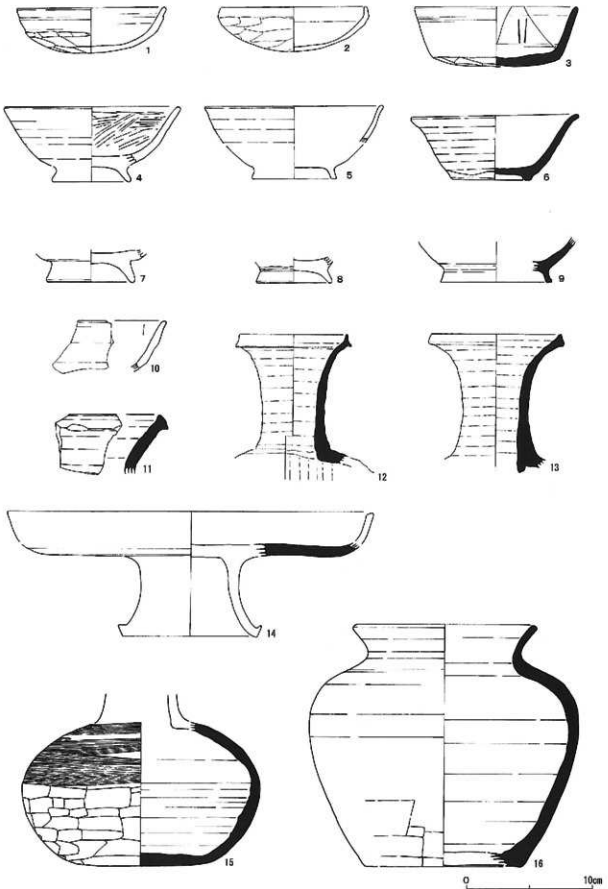


【溝埋土断面説明】

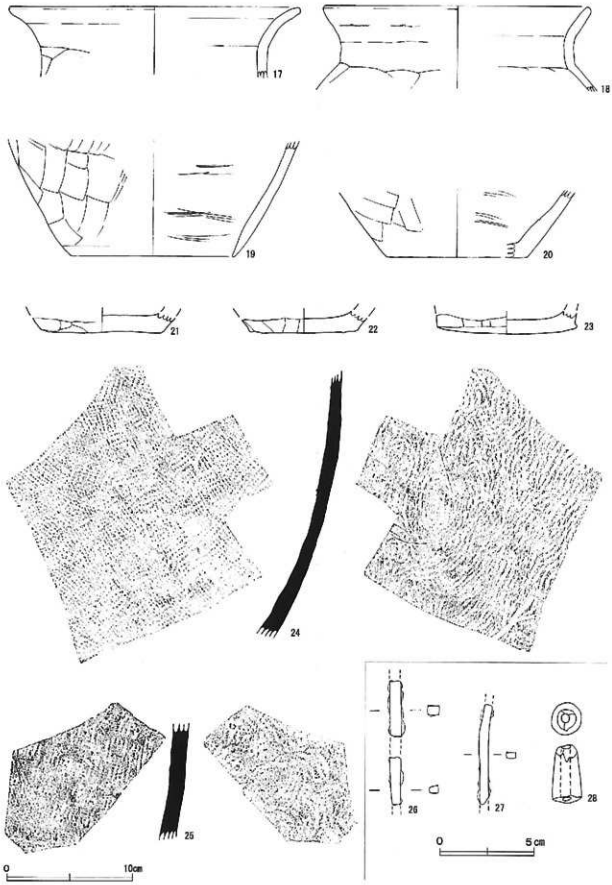
1	茶褐色土	炭化粒・焼土粒を少量含む。しまり少ない、粘性なし。
2	黒褐色土	洪岡B軽石を少量含む。しまりややあり、粘性なし。
3	暗茶褐色土	焼土粒子を少量含む。しまり・粘性あり。
4	茶褐色土	ローム粒を多量、炭化粒・焼土粒を微量含む。しまり・粘性あり。
5	暗茶褐色土	ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり。
6	黒褐色土	焼土粒・炭化粒を少量含む。しまり少ない、粘性あり。



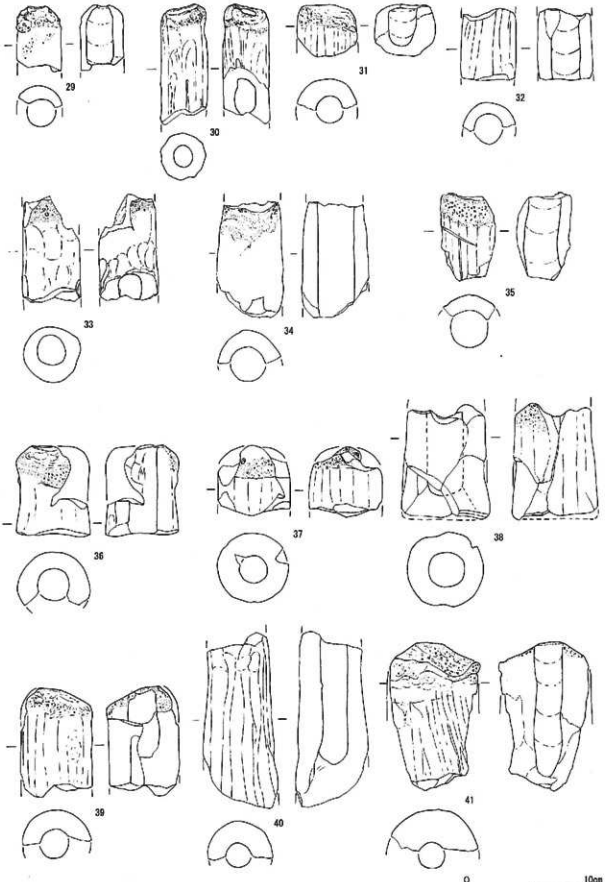
第５図　１号墳周溝実測図



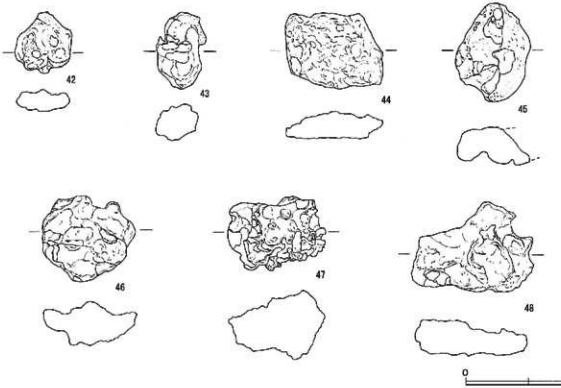
第６図　１号墳出土遺物実測図(1)



第７図　１号墳出土遺物実測図(2)



第８図　１号墳出土遺物実測図(3)



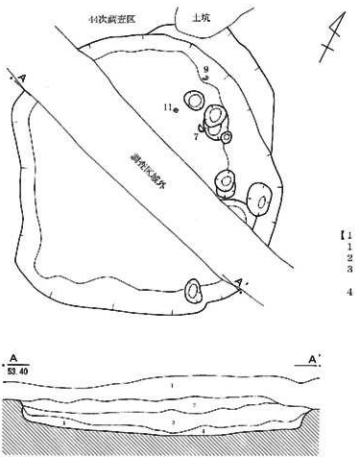
第９図　１号墳出土遺物実測図(4)

古墳周溝出土遺物観察表 (1)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備　考
1	坏	11.6	3.5	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒多	95%	図示
2	坏	11.6	3.6	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、バミス、礫砂粒	図示 35%	覆土、焼野概報掲載
3	坏	(12.7)	4.6	(10.0)	明灰色	良好	石英、長石、細礫	図示 20%	覆土、底部手持ちヘラ、暗文風線刻、末野産
4	高台埦	(13.7)	(4.6)	-	暗灰赤褐色	普通	石英、長石、チャート、礫砂粒	図示 20%	覆土、土師質、内面ミガキ＋黒色処理
5	高台埦	(14.0)	(2.9)	-	暗橙褐色	普通	礫砂粒、白色粒	図示 15%	覆土、土師質
6	須恵高台埦	13.0	5.1	6.4	黄褐～黒褐	不良	石英、チャート、雲母、片岩	100%	図示、磨滅あり、末野産
7	高台埦	-	(2.6)	(6.6)	橙色	やや悪	石英、角閃石、砂粒	図示 35%	覆土、磨滅あり
8	高台埦	-	(2.1)	(5.8)	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示 80%	覆土、土師質、内面ミガキ－黒色処理
9	須恵高台埦	-	(3.6)	(8.7)	灰色	良好	石英、長石、片岩	図示 20%	覆土、末野産
10	高台埦	-	-	-	明茶褐色	普通	石英、長石、雲母、微砂粒	破片	覆土、内面ミガキ
11	甕	-	-	-	明茶褐色	良好	石英、長石	破片	覆土、末野産
12	フラスコ瓶	(8.6)	(10.3)	-	淡灰色	良好	黒鉱、黒色粒	図示 90%	図示、藤馬産？、焼野概報掲載
13	長頸瓶	(10.4)	(11.0)	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示 90%	図示、末野産、焼野概報掲載
14	脚付盤	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩、細礫	図示 15%	覆土、末野産
15	長頸壺	-	(11.3)	10.7	明灰色	普通	石英、長石、白色粒	80%	図示、上段カキ目、下段手持ちヘラ、末野産
16	短頸壺	14.0	19.0	(12.3)	淡灰色	やや悪	微砂粒	図示 60%	図示、焼成甘く、体部剥離が目立つ、末野？
17	甕	(22.6)	(5.8)	-	橙色	普通	石英、長石、バミス、角閃石	図示 10%	覆土
18	甕	(20.6)	(6.6)	-	橙色	普通	石英、長石、バミス、角閃石	図示 25%	覆土、磨滅あり
19	甕	-	(9.1)	(12.5)	橙色	普通	石英、チャート、角閃石、微砂粒	図示 20%	覆土
20	甕	-	(5.4)	(11.0)	橙褐色	普通	石英、長石、片岩、バミス	図示 20%	覆土、土師質、非ロクロ
21	甕	-	(1.6)	9.6	暗橙褐色	普通	石英、長石、片岩	図示 50%	覆土、土師質、非ロクロ、底部に砂粒付着
22	甕	-	(1.8)	(8.5)	赤褐色	普通	石英、長石、片岩	図示 40%	覆土、土師質、非ロクロ、底部に砂粒付着
23	甕	-	(1.8)	11.0	にぶい橙褐	普通	石英、長石、片岩（重い）	図示 80%	覆土、土師質、非ロクロ、底部に砂粒付着
24	甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行叩き、内面青海波、末野産
25	甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行叩き、内面青海波、末野産
26	棒状鉄製品	長さ 3.0	幅 0.6	厚さ 0.5	重さ 4.6g	-	-	-	覆土、細い角棒状、釘か？
27	棒状鉄製品	長さ 3.2	幅 0.5	厚さ 0.3	重さ 2.1g	-	-	-	覆土、細い角棒状、釘か？
28	土錘	長さ 3.1	幅 1.6	孔径 0.5	重さ 7.1g	-	-	-	覆土
29	羽口	長さ 5.2	幅 3.5	孔径 (2.2)	灰黒色	-	粗砂粒	破片	覆土、先端部繊解発泡
30	羽口	長さ 9.4	幅 3.7	孔径 1.7	灰橙褐色	-	粗砂粒	破片	覆土、先端部繊解発泡

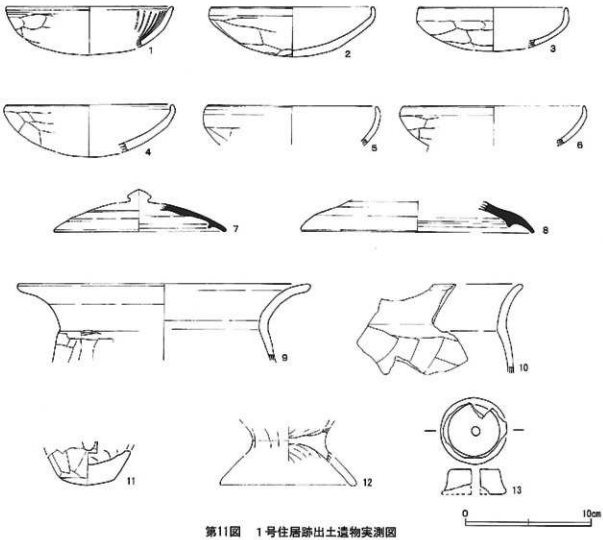
古墳周溝出土遺物観察表 (2)

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備　考
31	羽口	長さ 4.0	幅 4.8	孔径(2.1)	明灰～灰黒	-	細砂粒	破片	覆土、先端部融解発泡
32	羽口	長さ 5.6	幅 5.4	孔径2.2	橙～灰色	-	細砂粒	破片	覆土、羽口中央部
33	羽口	長さ 8.3	幅 4.6	孔径2.3	灰橙褐色	-	細砂粒	破片	覆土、先端部融解発泡
34	羽口	長さ 9.1	幅 5.3	孔径(2.8)	灰橙色	-	細砂粒	破片	覆土、先端部発泡
35	羽口	長さ 8.9	幅 4.4	孔径(2.9)	淡灰色	-	細砂粒	破片	覆土、先端部発泡
36	羽口	長さ 7.1	幅 5.8	孔径2.5	灰褐色	-	微砂粒	破片	覆土、先端部融解発泡
37	羽口	長さ 5.5	幅 6.8	孔径2.2	淡灰～灰黒	-	細砂粒	破片	覆土、先端部融解無泡
38	羽口	長さ 9.1	幅 6.9	孔径2.7	淡橙褐色	-	細砂粒	破片	覆土、羽口基部、一部発泡
39	羽口	長さ 8.5	幅 5.5	孔径(2.3)	淡灰～黒褐	-	細砂粒	破片	覆土、先端部融解無泡
40	羽口	長さ 13.3	幅 5.8	孔径(2.0)	淡黄褐色	-	細砂粒多	破片	図示
41	羽口	長さ 11.7	幅 7.1	孔径(2.1)	灰橙～暗灰	-	細粒、スサを含む	破片	覆土、先端部融解発泡、先端部鍛冶あり
42	鉄滓系遺物	長さ 4.8	幅 4.5	厚さ1.8	重さ42.4g	磁着度 強	-	-	覆土、扁平な浮まりの鉄滓
43	鉄滓系遺物	長さ 6.1	幅 3.9	厚さ2.8	重さ68.0g	磁着度 強	-	-	覆土、浮まりの鉄滓
44	塊形滓	長さ 5.0	幅 7.7	厚さ2.1	重さ120.8g	磁着度 弱	-	-	覆土、扁平で表面に気泡あり
45	塊形滓	長さ 7.7	幅 5.9	厚さ3.0	重さ141.1g	磁着度 弱	-	-	覆土、表面発泡、下面細かな凹凸
46	塊形滓	長さ 8.8	幅 7.4	厚さ3.4	重さ157.0g	磁着度 弱	-	-	覆土、下面細かな凹凸
47	鉄滓	長さ 7.8	幅 5.8	厚さ5.4	重さ173.3g	磁着度 弱	-	-	覆土、表面椀形状の凹凸と突起
48	塊形滓	長さ 7.1	幅 9.7	厚さ2.9	重さ226.0g	磁着度 弱	-	-	覆土、扁平で底面細かな凹凸



【1号住居跡土層説明】
1　暗褐色土　A軽石を多量含む。しまり・粘性弱い。
2　暗赤褐色土　パミスを少量含む。しまり・粘性なし。
3　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを微量含む。しまり少ない・粘性あり。
4　黄褐色土　ローム粒少量、ロームブロックを多量含む。しまり・粘性あり。

第10図　1号住居跡実測図



第11図　1号住居跡出土遺物実測図

1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備　考
1	坏	(13.0)	(3.2)	-	橙褐色	普通	石英、長石、角閃石	図示20%	覆土、放射状暗文
2	坏	(12.7)	4.0	-	茶褐色	良好	石英、角閃石、銀砂粒	図示40%	覆土
3	坏	(11.6)	(3.5)	-	明赤褐色	良好	石英、角閃石	図示20%	覆土
4	坏	(13.1)	(4.0)	-	茶褐色	普通	石英、角閃石	図示20%	覆土
5	坏	(13.3)	(3.0)	-	茶褐～黒褐	普通	石英、角閃石	図示10%	覆土
6	坏	(14.3)	(3.1)	-	明赤褐色	良好	石英、角閃石	図示10%	覆土
7	蓋	(13.4)	(2.2)	-	暗灰～灰黄	やや悪	石英、長石、片岩	図示45%	図示、末野産
8	蓋	(18.3)	(2.4)	-	明灰色	普通	石英、チャート、片岩、長石	図示15%	覆土、末野産
9	甕	(22.5)	(5.2)	-	明赤褐色	良好	石英、金雲母、銀砂粒	図示15%	図示
10	甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	口縁部破片	覆土
11	不明	-	(2.9)	4.4	淡赤褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示95%	図示、体部下端に穿孔あり
12	石付壺	-	-	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示80%	覆土
13	土製紡錘車	直径4.5	厚さ2.0	孔径0.7	重さ35.0g	普通	砂粒	70%	覆土

2号竪穴住居跡

調査区の北西に位置する。古墳周溝と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが判明している。

平面形態は長方形を呈し、東西4.65m、南北3.48mを測る。主軸方位は、N-80°-Wを示す。

壁はやや角度をもって掘り込まれ、床面は平坦である。床面確認面からの深さは、22cm前後を測る。

床面南西コーナーに土坑が検出された。平面形態は長方形で、長軸240cm、短軸161cmを測る。底面附近に焼土が堆積し、壁も被熱している。

カマドは、南東コーナーに構築されていた。規模は、全長114cm、炊口幅38cmを測る。底面は平坦で、煙道に向かい緩やかに立ち上がる。

壁溝及びピットは、検出されなかった。

出土遺物は、カマド内及びその周辺に集中していた。土師器の高台塊・小皿・甕、須恵器の坏、土製羽口、炉壁、鉄製鋤先、塊形滓・鉄滓などが出土した。須恵器は小破片であり、甕の形状などから、時期は10世紀後半と考えられる。また、北東コーナー沿いの床面上に粘土塊が出土した。白褐色を呈し、当時は生の状態で保管されていたものと想定される。

1号土坑

調査区北西に位置する。細長い土坑と重複するが、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが確認されている。

平面形態は不整楕円形を呈し、長軸260cm、短軸192cmを測る。東壁はやや角度を持ち、西壁は攪乱を受けており不明である。底面は平坦で、確認面からの深さは62cmである。

底面及び壁面の一部が、熱を受け焼土化していた。

塊形滓が底面からやや浮いた状態で出土した。

2号土坑

調査区の西端に位置する。

平面形態は円形を呈し、直径は119cmを測る。

壁は角度を持ち掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、26cmを測る。

遺物は、覆土中から土師器坏と鉄滓が出土した。

3号土坑

調査区の北西に位置する。

平面形態は円形を呈し、直径58cm、確認面からの深さ15cmを測る。

壁はやや角度を持って掘り込まれ、底面は平坦である。

出土遺物は、土師器の甕があるが、小破片のため図示し得なかった。

4号土坑

調査区の北西に位置する。1号墳の周溝と重複する。

平面形態は不整円形を呈し、直径92cm、深さ16cmを測る。床面は中心部が若干くぼむ。

底面からやや浮いた状態で、土師器坏・高台塊、瓦質浅鉢、鉄滓系遺物が出土した。

ピット群

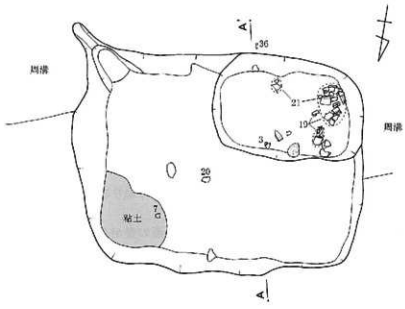
ピットは、調査区全面において多数が検出された。しかしながら、建物等の配列の判明したものはなかった。

いずれも円形を基本としており、直径21～118cm、深さは6～40cmを測る。

遺物は土師器・須恵器などが出土しているが、いずれも小破片であり、図示できうるものではなかった。

グリッド出土遺物

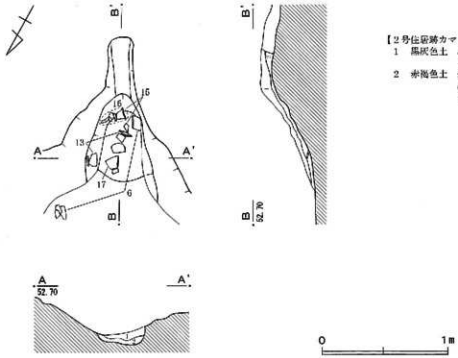
調査前段の表土剥ぎ等で出土した遺物を、グリッド出土遺物として最後に掲載した。縄文土器の深鉢をはじめ、土師器の坏・高台塊・甕、須恵器の坏・蓋・高台塊・脚付盤などがある。



【2号住居跡土層説明】
1　黒褐色土　砂粒を少量含む。しまり少ない。粘性なし。
2　淡灰色土　砂質。粘土粒を少量含む。しまり・粘性なし。
3　黒褐色土　ロームブロック少量含む。しまり・粘性あり。
4　暗茶色土　ロームブロック・焼土粒を微量含む。しまり・粘性少ない。
5　茶褐色土　ロームブロックを多量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
　　しまり少ない、粘性あり。
6　黒褐色土　焼土粒多量、ロームブロック・炭化粒を少量含む。

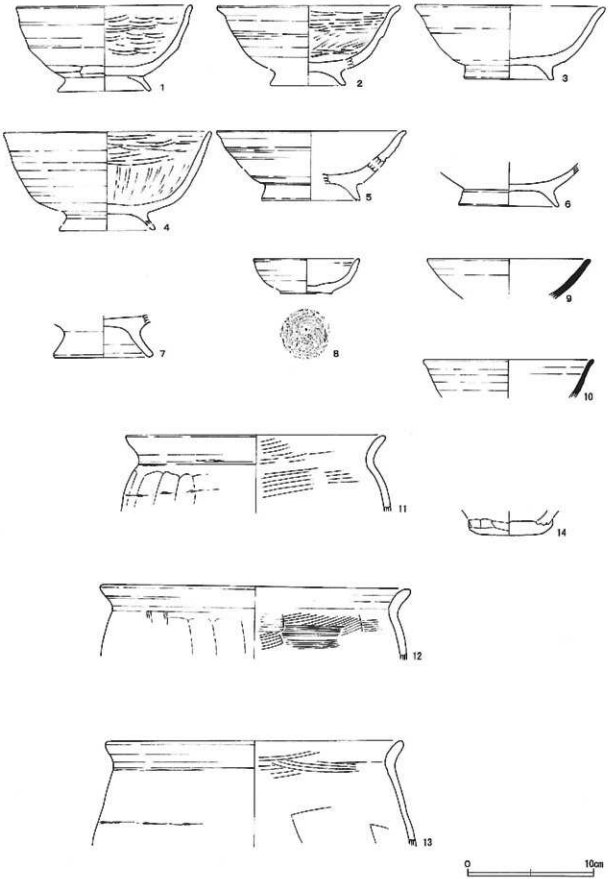
0　2m

第12図　2号住居跡実測図



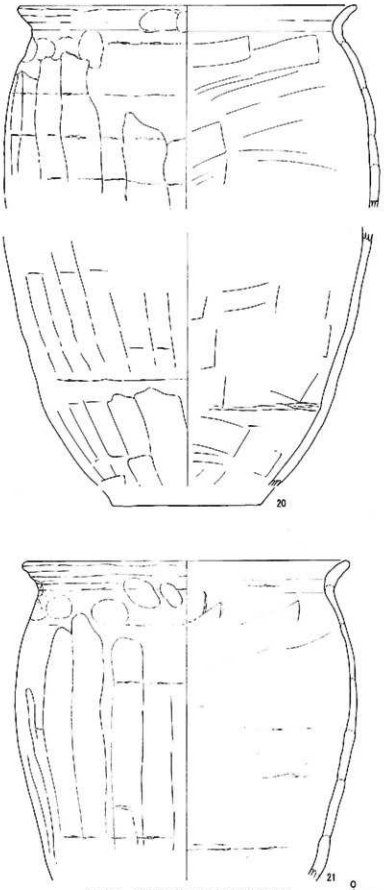
【2号住居跡カマド土層説明】
1　黒褐色土　炭化物・焼土粒を多量含む。
　　しまり少ない、粘性あり。
2　赤褐色土　焼土とロームブロック混合土。
　　炭化物を多量含む。
　　しまり・粘性少ない。

第13図　2号住居跡カマド実測図

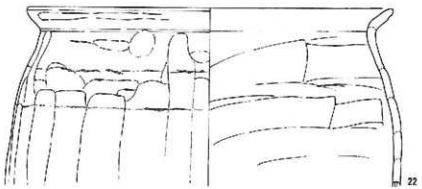


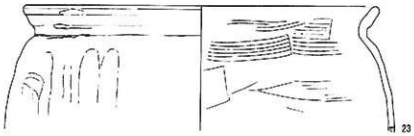
第14図　2号住居跡出土遺物実測図(1)

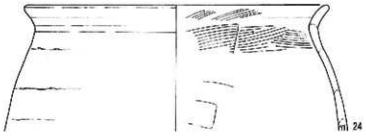
第15図　2号住居跡出土遺物実測図(2)

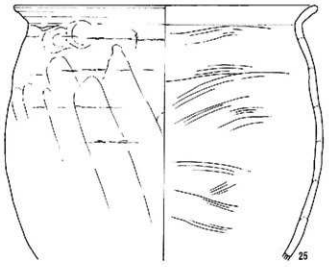


第16図　2号住居跡出土遺物実測図(3)

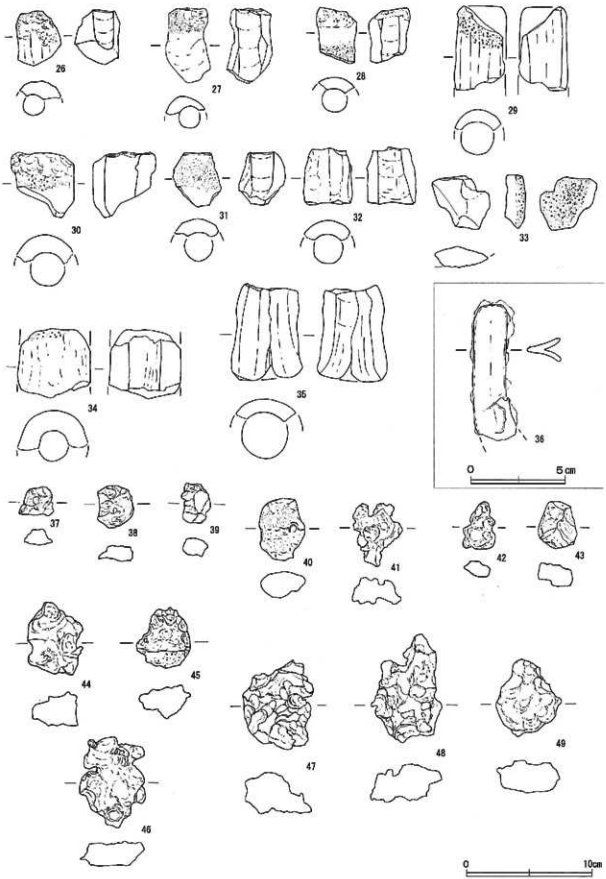








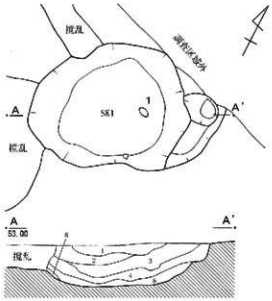
第17図　２号住居跡出土遺物実測図(4)



第18図　2号住居跡出土遺物実測図(5)

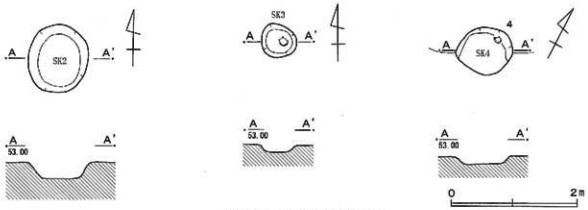
2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	高台椀	(13.8)	〈5.6〉	-	灰褐～灰橙	やや悪	石英、チャート、酸化鉄粒、砂粒	図示35%	覆土、土師質、内面ミガキ＋黒色処理
2	高台椀	(14.2)	〈4.9〉	-	灰褐色	普通	石英、チャート、酸化鉄粒	図示20%	覆土、土師質、内面ミガキ＋黒色処理
3	高台椀	(14.7)	5.8	(7.0)	橙色	普通	石英、チャート、雲母、砂粒	図示25%	図示、土師質
4	高台椀	16.2	(7.8)	(7.4)	橙褐色	普通	石英、チャート、砂粒	図示80%	覆土、土師質、内面ミガキ＋黒色処理
5	高台椀	(14.7)	(5.5)	(7.5)	にぶい橙褐	普通	石英、チャート、砂粒	図示30%	覆土、土師質
6	高台椀	-	〈3.5〉	7.8	橙色	やや悪	石英、チャート、角閃石、雲母、片岩	図示95%	カマド、土師質、内面ミガキ＋黒色処理
7	高台椀	-	〈3.3〉	7.5	暗赤褐色	普通	石英、金雲母、微砂粒	図示95%	図示、土師質
8	小皿	(8.2)	2.7	4.0	暗赤褐色	良好	石英、長石、微砂粒	図示45%	覆土、土師質、回転糸切り未調整
9	坏	(12.7)	〈3.2〉	-	灰色	普通	石英、黒色粒、(粗い)	図示15%	覆土、末野産
10	坏	13.3	〈3.0〉	-	暗灰色	普通	石英、長石、黒色粒、(粗い)	図示10%	覆土、末野産
11	甕	(20.4)	〈6.1〉	-	赤褐色	普通	石英、長石、雲母、チャート	図示10%	覆土、土師質、非ロクロ、内面ハケメ
12	甕	(24.1)	〈5.6〉	-	にぶい橙褐	普通	石英、長石、チャート、角閃石	図示10%	覆土、土師質、非ロクロ、内面ハケメ
13	甕	(23.3)	〈8.4〉	-	橙褐色	普通	石英、長石、パミス、角閃石、細礫	図示25%	カマド、土師質、非ロクロ、口縁ハケメ
14	甕	-	〈1.3〉	6.6	暗赤褐色	普通	石英、長石、チャート、角閃石、片岩	図示90%	覆土、非ロクロ、底部無調整、底部に砂粒
15	甕	(23.2)	〈24.7〉	-	暗橙褐色	普通	石英、長石、片岩、角閃石、(粗い)	図示20%	カマド、土師質、非ロクロ、内面ハケ後ナデ
16	甕	-	〈5.8〉	9.2	赤褐色	普通	石英、長石、チャート、片岩	図示60%	カマド、土師質、非ロクロ、底部に砂粒
17	甕	(22.6)	〈13.3〉	-	にぶい赤褐	普通	石英、長石、パミス、角閃石、片岩	図示25%	カマド＋古墳周溝、土師質、非ロクロ
18	甕	-	〈9.3〉	-	橙茶褐色	普通	石英、長石、チャート、角閃石、片岩	図示25%	カマド＋古墳周溝、土師質、非ロクロ
19	甕	26.4	〈16.0〉	-	赤褐色	普通	石英、長石、片岩、パミス、角閃石	図示75%	カマド＋土坑、土師質、非ロクロ
20	甕	-	〈20.5〉	-	暗茶褐色	普通	石英、長石、パミス、角閃石	図示30%	図示、土師質、非ロクロ
21	甕	(25.3)	〈25.1〉	-	橙褐色	普通	石英、チャート、片岩、角閃石	図示35%	図示、土師質、非ロクロ
22	甕	28.6	〈14.0〉	-	赤褐色	普通	石英、長石、チャート、角閃石	図示70%	図示、土師質、非ロクロ
23	甕	(27.7)	〈9.8〉	-	暗赤褐色	良好	石英、長石、パミス	図示20%	図示、土師質、非ロクロ、内面ハケメ＋ナデ
24	甕	(23.7)	〈9.9〉	-	赤褐色	普通	石英、長石、チャート、パミス	図示10%	古墳周溝、土師質、非ロクロ、口縁ハケメ
25	甕	(23.6)	〈20.0〉	-	暗茶褐色	普通	石英、長石、パミス、角閃石	図示20%	住居内土坑＋古墳周溝、土師質、非ロクロ
26	羽口	長さ4.3	幅3.5	孔径(1.7)	灰色	-	微砂粒	破片	覆土、羽口先端部溶解発泡
27	羽口	長さ5.9	幅3.6	孔径(1.8)	灰赤褐色	-	細砂粒	破片	覆土、先端部溶解発泡
28	羽口	長さ4.3	幅3.2	孔径(2.0)	灰黄褐色	-	細砂粒	破片	覆土、先端部溶解発泡
29	羽口	長さ6.6	幅3.9	孔径(2.6)	灰色	-	細砂粒	破片	覆土、先端部発泡
30	羽口	長さ5.2	幅5.0	孔径(2.6)	黒褐～黄褐	-	粗砂粒	破片	覆土、先端部溶解発泡
31	羽口	長さ4.2	幅3.8	孔径(2.2)	灰黒色	-	微砂粒	破片	覆土、先端部発泡
32	羽口	長さ4.5	幅3.8	孔径(2.4)	灰橙褐色	-	粗砂粒	破片	覆土
33	炉壁	長さ4.2	幅4.5	厚さ1.6	-	-	石英微粒少量	破片	覆土、表面発泡、内面還元化
34	羽口	長さ5.5	幅5.7	孔径(2.4)	淡灰色	-	粗砂粒	破片	覆土
35	羽口	長さ7.6	幅5.7	孔径(3.6)	灰橙色	-	粗砂粒	破片	覆土、羽口基部破片
36	鋤先	長さ7.1	幅1.8	厚さ0.4	重さ18.1g	-	-	20%	図示、鋤先基部破片
37	鉄塊系遺物	長さ2.3	幅2.7	厚さ1.2	重さ10.2g	磁着度 強	-	-	住居内土坑、亀裂あり
38	鉄塊系遺物	長さ3.3	幅2.9	厚さ1.3	重さ15.3g	磁着度 強	-	-	覆土
39	鉄塊系遺物	長さ3.2	幅2.3	厚さ1.4	重さ13.4g	磁着度 強	-	-	覆土、亀裂あり
40	鉄滓	長さ4.9	幅3.7	厚さ2.0	重さ42.5g	磁着度 中	-	-	住居内土坑、砂粒付着
41	鉄滓	長さ5.0	幅4.0	厚さ2.1	重さ26.2g	磁着度 弱	-	-	住居内土坑、表面縮緬状
42	鉄滓	長さ3.8	幅2.6	厚さ1.3	重さ11.8g	磁着度 中	-	-	住居内土坑、砂粒付着
43	鉄滓	長さ3.7	幅3.1	厚さ1.7	重さ22.8g	磁着度 弱	-	-	住居内土坑、気泡少量
44	鉄滓	長さ5.7	幅4.4	厚さ2.7	重さ68.7g	磁着度 弱	-	-	覆土
45	椀形滓	長さ4.7	幅4.2	厚さ2.6	重さ57.4g	磁着度 弱	-	-	覆土、表面発泡
46	鉄滓	長さ7.1	幅5.2	厚さ1.9	重さ68.6g	磁着度 中	-	-	覆土、表面流動状の突起が多い
47	椀形滓	長さ7.1	幅5.6	厚さ3.3	重さ107.1g	磁着度 弱	-	-	覆土、全体的に凹凸が目立つ
48	鉄滓	長さ8.6	幅5.6	厚さ2.8	重さ70.3g	磁着度 弱	-	-	覆土、上面流動状で下面は細かい縮緬状
49	鉄滓	長さ6.1	幅5.1	厚さ2.6	重さ78.0g	磁着度 中	-	-	覆土、表面緩やかな凹凸

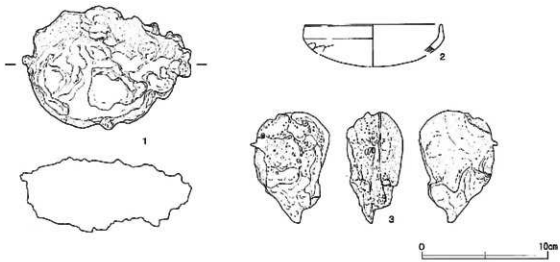


【1号土坑土層説明】

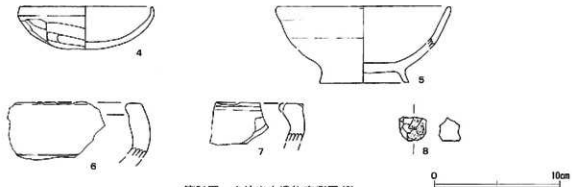
1	黒褐色土	炭化物を多量、ロムブロックを微量含む。しまり少ない。粘性なし。
2	暗褐色土	ロームブロックを少量含む。しまり・粘性少ない。
3	黒褐色土	ロームブロックを多量含む。しまり・粘性少ない。
4	暗黄褐色土	ロームブロックを少量含む。しまり少ない、粘性あり。
5	黒褐色土	ロームブロックを多量含む。しまりなし、粘性あり。
6	暗黄褐色土	ロームブロックを少量含む。しまり・粘性少ない。



第19図　1～4号土坑実測図



第20図　土坑出土遺物実測図(1)

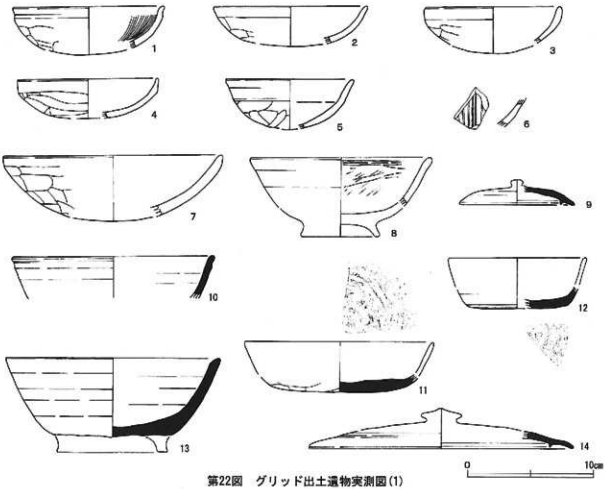


第21図　土坑出土遺物実測図(2)

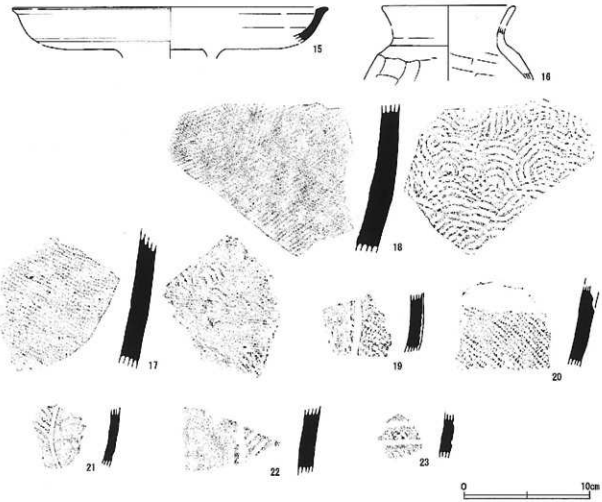
土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備　考
2	坏	(10.7)	(2.3)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	国ホ 10%	SK-2 覆土
4	坏	(10.2)	3.4	-	橙褐色	良好	石英、角閃石	国ホ 70%	SK-4 国ホ
5	高台坏	(13.6)	(3.3)	-	灰褐褐色	普通	石英、角閃石	国ホ 10%	SK-4 覆土、土師質
6	鉢鉢	-	-	-	暗灰色	普通	石英、角閃石、微砂粒	破片	SK-4 覆土、瓦質土器（奈良火鉢）
7	浅鉢	-	-	-	灰灰色	普通	石英、角閃石	破片	SK-4 覆土、瓦質土器（奈良火鉢）

番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	磁着度	胎土	残存率	備　考
1	椀形滓	13.3	9.7	4.9	573.0	強	-	-	SK-1 国ホ、上面やや平坦、中心部に空洞有
3	羽口	8.8	6.2	4.4	-	-	砂質粘土に スサ混和	破片	SK-2 内面発泡
8	鉄塊系遺物	2.2	1.8	1.7	10.0	強	-	-	SK-4 暗褐色で光沢有



第22図　グリッド出土遺物実測図(1)



第23図　グリッド出土遺物実測図(2)

グリッド出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底厚 (cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備　考
1	坏	(11.8)	(4.8)	-	橙色	普通	石英、角閃石、砂粒	口縁 15%	内面放射状暗文
2	坏	(12.0)	(3.2)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	口縁 10%	
3	坏	(10.5)	(3.0)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	口縁 15%	
4	坏	(11.0)	(3.1)	-	赤褐～灰黒	普通	雲母、精良	口縁 45%	
5	坏	(10.0)	(4.0)	-	灰黄褐色	普通	石英、角閃石	口縁 45%	
6	坏	-	-	-	黄赤褐色	良好	精良、堆密	破片	底内面土師器、内面放射状暗文
7	坏	(17.2)	(5.1)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート、砂粒	口縁 12%	
8	背壺蓋	(14.1)	(3.8)	-	灰褐褐色	普通	石英、チャート、角閃石、砂粒	口縁 15%	上師質、内面ミガキ＋黒色処理
9	蓋	(8.8)	(1.5)	-	灰白色	普通	石英、長石、黒色粒	口縁 25%	末調？
10	坏	(15.7)	(3.3)	-	灰色	良好	石英、長石、黒色粒、細礫	口縁 10%	末調
11	坏	-	(1.4)	(11.0)	明灰色	良好	石英、長石、片岩	底糸 20%	末調、内面に青海波風な圧痕、底部手持ち篦
12	坏	-	(1.7)	(8.0)	灰褐色	良好	石英、長石、黒色粒	底糸 15%	末調、底部全面回転篦削り
13	須恵器台境	(16.9)	(6.2)	-	橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石、片岩、砂粒	口縁 30%	末調、脚先端、底部静止糸切り
14	蓋	(20.7)	(1.3)	-	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒	口縁 10%	末調
15	脚付壺	(24.7)	(2.8)	-	淡灰色	やや悪	石英、長石、チャート、片岩	口縁 10%	末調、磨滅あり。
16	小形壺	-	(4.2)	-	橙色	普通	石英、長石、チャート、微砂粒	底糸 20%	
17	甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	末調、内面青海波＋平行、外面平行叩き
18	甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	末調、内面青海波、外面平行叩き
19	縄文・深鉢	-	-	-	茶褐色	普通	砂粒多（石英、角閃石他）	胴部破片	加曽利E式、櫛描E細両RL縄文
20	縄文・深鉢	-	-	-	灰褐色	普通	砂粒多（石英、長石、白色粒他）	胴部破片	加曽利E式、RL縄文、他情み接合部で剥離
21	縄文・深鉢	-	-	-	明橙褐色	普通	砂粒多（石英、チャート他）	胴部破片	加曽利E式、沈線区画、RL縄文
22	縄文・深鉢	-	-	-	灰黄褐色	やや悪	砂粒多（石英、チャート他）	胴部破片	加曽利E式、沈線区画、LR縄文
23	縄文・深鉢	-	-	-	暗赤褐色	普通	微砂粒（石英、チャート他）	胴部破片	不明、沈線区画、RL縄文

Ⅳ まとめ

すでに述べてきたように、今回の調査では、古墳周溝、竪穴住居跡、土坑が検出された。以下、遺構ごとに順を追ってまとめてみたい。

1．古墳

今回発見された古墳は、「内出八幡塚古墳」と呼称される。

開墾に先立ち昭和８年に発掘調査が行われた。その概要が当時の新聞に掲載され注目を集めたが、詳細については柿沢俊夫氏（故人）により「岡部村郷土史資料」に記載された。それによると、東西10間、南北11間の円墳であり、周囲に墳輪は配置せず、代わりに三段に玉石を並べて周囲を取り巻いていたという。石室は、その図から胴張型横穴式石室であったことが伺える。長さ15尺、最大幅7.5尺を測り、利根川沿岸から産出される安山岩で構築されていた。長軸を南北にそろえ、南に玄道が続いていた。石室内部からは、直刀１、柄頭太刀１、小刀１、耳環３、弓弭２、鉄鏃25本、腕輪１、耳輪３、玉類多数が出土した。また、木棺の痕跡も確認されている。

周辺は近年まで畑に取り囲まれていたが、平成元年に岡中央土地区画整理事業が立ち上がり、開発に伴う発掘調査が急増した。本古墳に係る調査は、現在までに６地点に及んでいる（第26図）。これまでの調査の結果、本古墳の周溝は、南部で途切れながらも、外径47ｍ、内径33ｍ、幅５～10ｍ、深さは凹凸をもちながら最深部で80cmを測ることが判明した。先の「岡部村郷土史資料」記載の墳丘規模10間（約18.2ｍ）と調査結果による周溝内径とが異なることから、墳丘と周溝の間にテラスの存在が想定されている（鳥羽2006）。

近年の調査結果からも埴輪は出土せず、周溝の底部および埋土下層から７世紀後半～10世紀代に至る土器が出土している。また、「岡部村郷土史資料」に角閃石安山岩が使用されたとあるが、今回の調査により同石が周溝内から出土したことはこれを裏付けるものであろう。なお、周溝埋土上層から浅間Ｂ軽石が検出されたことから、古代末にはほぼ埋没した状況が想定される。

こうした規模や昭和８年調査時の出土遺物の豊富な内容から、本古墳は当地方の有力首長の墓と想定されている。

2．竪穴住居跡

竪穴住居跡は、２軒が検出された。

１号住居跡は、南半部の調査であったが、隣接する44次調査により全容がほぼ明らかとなった。一辺約4.3ｍの不整方形を呈し、カマドが存在する可能性が低いことなどから、「住居」として機能していたかは不明である。時期は、７世紀第４四半期と考えられる。

２号住居跡は、10世紀後半と想定される。床面及び覆土中から鉄製品（鏃先）１点と羽口、塊形滓、鉄滓が出土している。また、炉体は検出されなかったが、炉壁の小破片１点が出土している。なお、甕の多さが特筆される。完形品はなかったが、口縁部だけでも11個体分はある。焼入れ用の水を貯えておくためのものであろうか。

なお、床面南西コーナーに接して長方形の土坑があり、内面の一部が被熱していた。その対角線上に位置する北西コーナー附近には、粘土塊が堆積していた。

3．土坑

土坑は、４基が検出された。

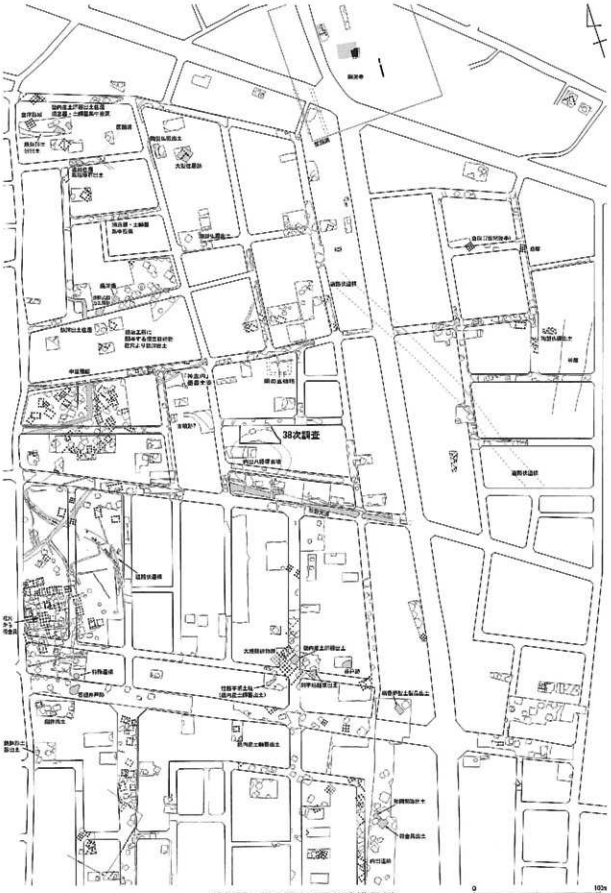
１号土坑は不整楕円形を呈し、壁の一部が被熱していた。直径16cmを測る大型の塊形滓１点が、底面からやや浮いた状態で出土した。

２～４号土坑は平面円形を呈し、１号土坑に比較し規模が小さい。２号土坑からは、炉壁が出土した。小破片であるが、砂質粘土にスサを混和させ、内面は高熱を受けて発泡している。４号土坑からは鉄塊系遺物が出土している。

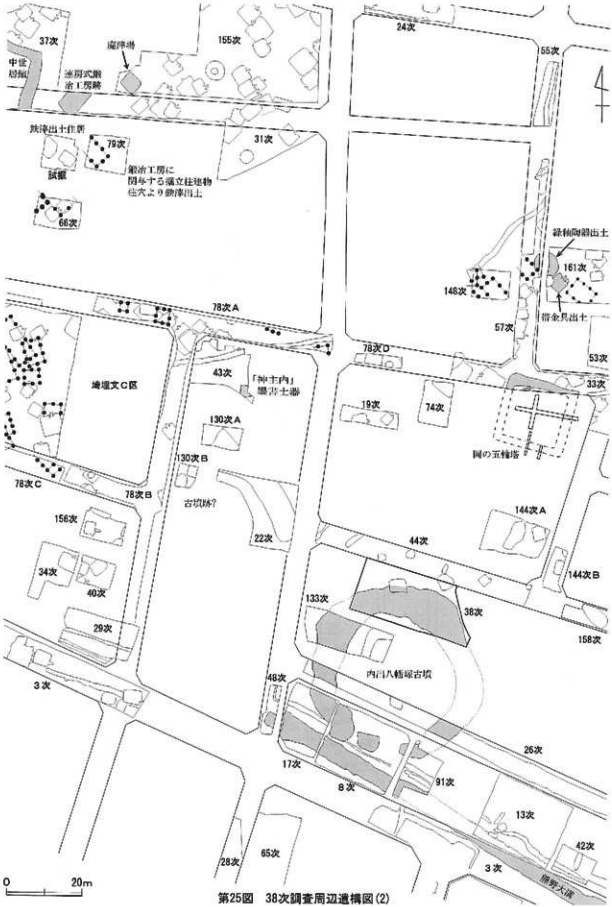
更に北に接する44次調査においても鍛冶関連遺物が出土しているので、参考のため掲載した。性格不明土坑（SX1）からは塊形滓と羽口が、１号土坑から羽口と鉄滓、３号土坑から塊形滓・鉄塊系遺物・炉壁が出土した。また、２号土坑は鍛冶関連遺物の出土はないが、底面及び壁面の一部が被熱により焼土化していた。さらに、５号土坑は小鍛冶炉と思われる円形の浅い窪みを有し、内面が被熱していた。覆土上層から土師器の小皿と甕が出土している。

これらは、伴出した土器（高台埦・皿・甕）からおおむね10世紀後半の時期が想定される。

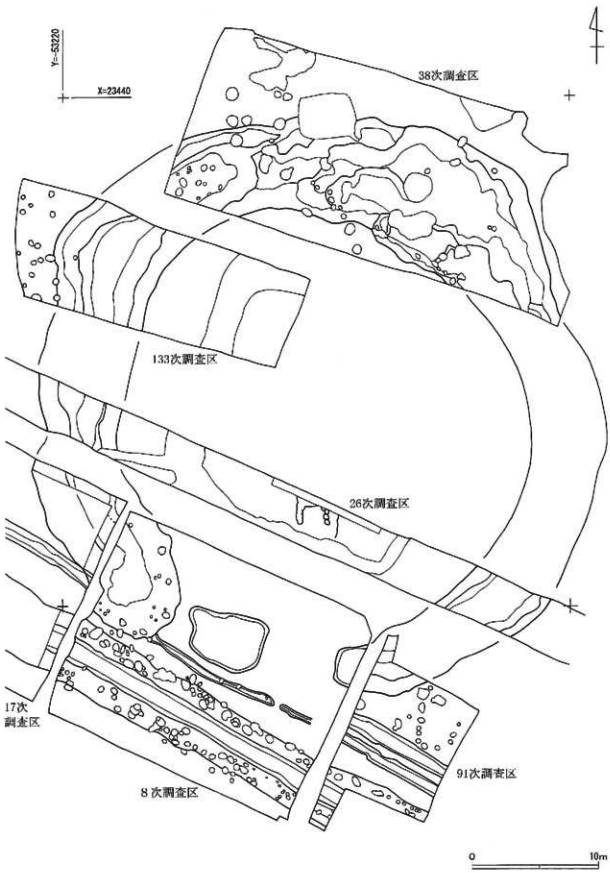
なお、内出八幡塚古墳の周溝覆土中からも羽口や塊形滓・鉄滓が出土している。10世紀代の土器も



第24図　38次調査区周辺遺構図(1)



第25図　38次調査周辺遺構図(2)



第26図　内出八幡塚古墳全体図

出土していることから、周溝が完全に埋没する以前に投棄されたものであろう。

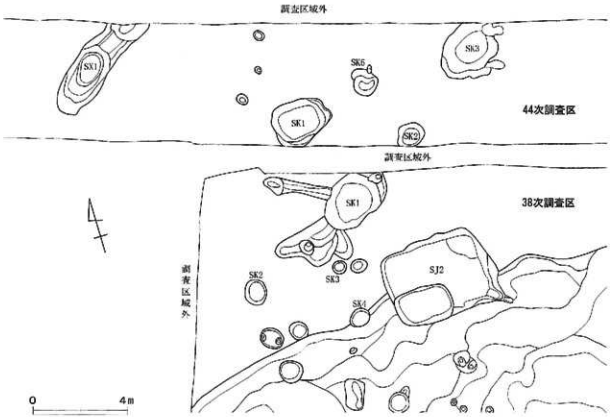
さて、38次調査1号土坑と44次調査1・3号土坑は、いずれも同様な平面形態と規模を呈している。さらに、これらの土坑群と小鍛冶炉（44次SK5）、2号住居跡との規則的な配置が看取され、有機的に機能していたことが推測される。時期は、先述したとおり10世紀後半と想定される。

なお、今回の調査では検出されなかったが、炉壁の出土や大型の羽口の存在と併せ、大鍛冶炉が近接して存在した可能性が高いと考えられる。

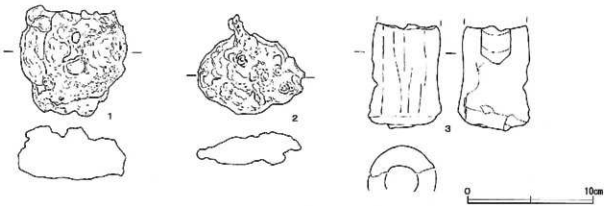
律令体制の崩壊後、如何なる人たちの手によりどのような鍛冶が行われたのかを解明していくことが、今後の課題と考える。

引用・参考文献

・岡部町教育委員会 2001「岡部町の遺跡」
・岡部町教育委員会 2002「古代の役所」
・深谷市教育委員会 2006「岡部町史　原始・古代資料編」
・鳥羽政之 2006「古代榛沢郡の鉄生産」『武蔵野』
・赤熊浩一 2006「武蔵野における古代から中世の製鉄・鋳造遺跡」『武蔵野』



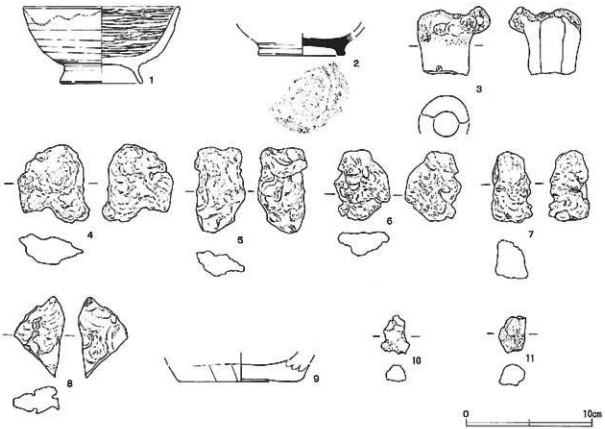
第27図　38次・44次調査鍛冶関連遺構図



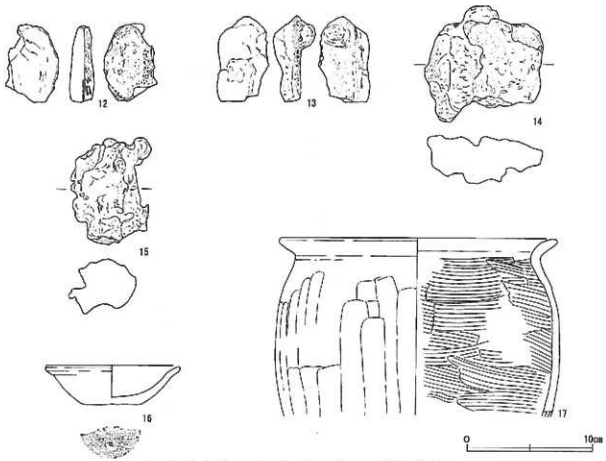
第28図　44次性格不明土坑出土遺物実測図

SX-1 出土遺物観察表

番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	磨耗度	胎土	残存率	備　考
1	塊形滓	8.7	8.6	4.2	282.0	弱	-	-	遺土、上面凹凸が著しく下面は平坦
2	塊形滓	7.8	8.4	2.7	155.9	弱	-	-	遺土、上面粒状突起など凹凸が目立つ
3	羽口	8.2	5.8	孔径 (2.6)	色調灰褐色	-	砂粒、スサ混和	破片	遺土、基部



第29図　44次１・２・３・５号土坑出土遺物実測図 (1)



第30図　44次１・２・３・５号土坑出土遺物実測図(2)

土坑出土遺物観察表

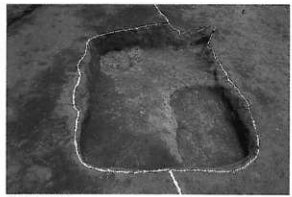
番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備　考
1	高台境	12.2	6.1	6.4	橙褐色	良好	石英、チャート、銅鐸	99%	SK-1 図示、土師質、黒色処理ミミガキ
2	高台境	-	〈1.8〉	5.8	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示 35%	SK-1 覆土、土師質
3	羽口	長さ 5.4	幅 5.7	孔径 (2.0)	灰黒～明灰	-	微砂粒	破片	SK-1 覆土、先端部磁解発泡、スラグ融着
4	鉄滓	長さ 6.1	幅 5.6	厚さ 2.2	重さ 66.9g	磁着度 弱	-	-	SK-1 覆土
5	鉄滓	長さ 6.7	幅 4.0	厚さ 2.0	重さ 66.0g	磁着度 弱	-	-	SK-1 覆土、表面凹凸が著しく一部発泡
6	鉄滓	長さ 5.5	幅 4.4	厚さ 1.9	重さ 50.2g	磁着度 中	-	-	SK-1 覆土、表面凹凸が著しく内面発泡
7	鉄滓	長さ 5.6	幅 3.2	厚さ 3.0	重さ 63.5g	磁着度 弱	-	-	SK-1 覆土、一部発泡
8	鉄滓	長さ 6.3	幅 4.0	厚さ 2.2	重さ 45.5g	磁着度 弱	-	-	SK-1 覆土、表面棒状突起、内面発泡
9	鉢	-	〈1.7〉	9.8	淡赤褐色	普通	石英、チャート、片岩、酸化鉄	図示 95%	SK-2 覆土、土師質、底部に砂粒付着
10	鉄塊系遺物	長さ 3.1	幅 2.3	厚さ 1.3	重さ 11.7g	磁着度 強	-	-	SK-3 覆土、暗褐色で亀裂あり
11	鉄塊系遺物	長さ 2.9	幅 2.1	厚さ 1.7	重さ 11.0g	磁着度 強	-	-	SK-3 覆土、暗褐色で亀裂あり
12	炉壁	長さ 6.1	幅 4.2	厚さ 1.9	-	-	微砂粒	破片	SK-3 覆土、内面磁解発泡
13	炉壁	長さ 6.8	幅 4.0	厚さ 1.7	-	-	微砂粒	破片	SK-3 覆土、内面磁解発泡
14	塊形滓	長さ 9.1	幅 9.4	厚さ 3.3	重さ 255.0g	磁着度 弱	-	-	SK-3 覆土、表面発泡、下面凹凸が目立つ
15	塊形滓	長さ 8.5	幅 6.4	厚さ 4.3	重さ 169.2g	磁着度 弱	-	-	SK-3 覆土、表面の凹凸が著しい、木炭付着
16	小皿	(10.4)	3.0	4.9	灰赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示 30%	SK-5 図示、土師質、回転糸切り未調整
17	甕	21.6	14.1	-	明赤褐色	普通	石英、長石、角閃石、パミス	図示 20%	SK-5 図示、土師質、非ロクロ、内面ハケメ

写真図版

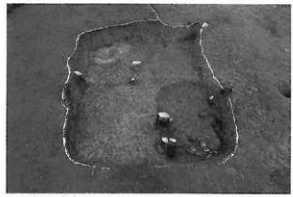
調査区全景（北から）

調査区全景（西から）

1号住居跡


2号住居跡

2号住居跡カマド


2号住居跡遺物出土状況

2号住居跡カマド遺物出土状況

1号土坑

図版２

１号墳№１

１号墳№６

１号墳№12

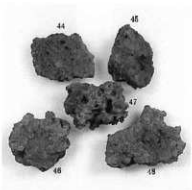
１号墳№13

１号墳№15

１号墳№26・27

１号墳№29～35

１号墳№36～41



１号墳№44～48

１号墳№42・43

１号住№２

１号住№４

１号住№７

１号住№13

２号住№１

２号住№３

２号住№15

２号住№４

２号住№６

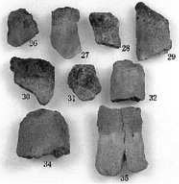
２号住№19

２号住№21

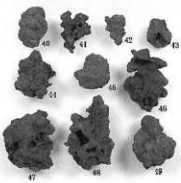
２号住№22

２号住№33

２号住№36



２号住№26～32・34・35



２号住№40～49

２号住№37～39

十坑№１

十坑№３（内外）

図版4

土坑No.4

土坑No.8

グリッドNo.4

グリッドNo.5

グリッドNo.13

グリッドNo.19～23

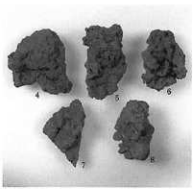
44次SX1No.1

44次SX1No.2

44次SX1No.3

44次土坑No.3

44次土坑No.1



44次土坑No.4～8

44次土坑No.10・11

44次土坑No.12（外内）

44次土坑No.13（外内）

44次土坑No.14

44次土坑No.15

44次土坑No.16

44次土坑No.17

報告書抄録

ふりがな	くまのいせき
書　名	熊野遺跡Ⅵ
副書名	
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	第82集
編著者名	宮本直樹・竹野谷俊夫
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366-0823　深谷市本住町17番地3　℡048(572)9581
発行日	平成19年3月1日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
熊野遺跡 (38次調査)	埼玉県深谷市岡字内出2866	11218	63－17	36° 12′ 24″	139° 14′ 27″	平成7年6月1日から 平成7年7月31日まで	753㎡	アパート建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 官衙跡 居館跡	古墳時代 奈良～ 平安時代 中世	古　墳 竪穴住居跡 土　坑 ピット	土師器 須恵器 土製品 石製品	内出八幡塚古墳の周溝の一部を検出し、出土遺物から7世紀前半の時期が想定される。 また、10世紀後半の溝状遺構も検出した。

熊野遺跡VI

2007年3月1日

編集発行　●深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地3